

FUMIE テストを用いた「おたく」に対する 潜在的態度調査

菊池 聡 (信州大学人文学部文化情報論講座)
金田 茂裕 (信州大学人文学部文化情報論講座)
守 一雄 (信州大学教育学部教育科学講座)

Assessment of implicit attitudes towards “*Otaku*” concepts with a paper-and-pencil implicit association test

Satoru KIKUCHI: Department of Human Sciences, Faculty of Arts,
Shinshu University

Shigehiro KINDA: Department of Human Sciences, Faculty of Arts,
Shinshu University

Kazuo MORI: Department of School Psychology and Counseling,
Faculty of Education, Shinshu University

Ninety-five undergraduates belonging to four different hobby groups took two different types of attitudinal assessment measures towards “Otaku” concept; an implicit measure recently developed by Mori (2006) and two explicit measures developed by Kikuchi (2000). The results showed that these three measures were inter correlated and the implicit measure failed to discriminate the four groups, but most Otaku-cultured group showed a slight positive attitude towards Otaku-concepts. Being Otaku was once strongly associated with negative image among the Japanese students. However, the present results showed the Otaku image has become neutral in both implicit and explicit measures.

キーワード：潜在連合テスト おたく 潜在イメージ

問 題

「おたく」という言葉は、1983年に中森明夫が月刊誌連載の中で、同人誌販売会に集まる青少年たちの特異な行動様式や外見を揶揄して命名したものとされている(中森, 1989)。この命名の経緯からして、「おたく」という言葉は明らかに差別的でネガティブな意味を含

む表現であった。すなわち、「サブカルチャーといわれる何かのジャンルにマニアックに没頭し、同好の仲間と距離をとったつきあいを持つ以外は、一般的コミュニケーションが苦手な自閉的で根の暗い少年たちへの蔑称を含んだ呼び名」(浅羽, 1991)であり、80年代末までは一部の若者の間でのみ自虐的に使われた一種のジャーゴンであった。

このネガティブな言葉が一般に広く知られるようになったきっかけは、1989年の連続幼女殺人事件の容疑者が、「おたく」と形容されて大きく報道されたことであった。そして、この容疑者になぞらえて、現実世界とアニメやゲームの空想世界の区別がつかなくなり、そのため不可解な犯罪に走りかねない「おたく」というステレオタイプが一般にも共有されるようになった。この時期には、「おたく」という言葉自体が、NHKでは放送問題用語とされて使用できなかったとされている(岡田, 1996)。また、このような「おたく」を特定の(特に性的な)犯罪と結びつける姿勢は、現在においてもしばしばメディア報道に見られるものである。

しかし、こうしたネガティブな「おたく」イメージは1990年代初頭から中盤以降に変化を見せてきた。きっかけとなったのは、バブル崩壊後、従来の商品市場が勢いを失う中で、「おたく」的な青少年層をターゲットとしたマンガやアニメ、ゲームなどの市場が急拡大し、これらが「おたく」系産業として有望視されるようになったことである。また、これら「おたく」系コンテンツは、唯一海外からも評価される日本を代表する文化コンテンツ産業として位置づけられるようになった。「おたく」層は特定の商品に関しては高い消費購買行動を示し、市場としての将来性が高い。この点に着目した諸企業は、細かな「おたく」ニーズを掘り起こして大きな市場に育てると同時に、「おたく」を卒業させない事業戦略を採り、市場規模はさらに拡大を続けることとなった(皆川, 2006)。

このような経済要因の変化が、「おたく」文化が社会的に容認される素地を作り出し、ネガティブな面のみ強調されていた「おたく」の心理行動傾向に対して、「こだわりを持った消費者」という面からのポジティブな評価がもたらされるようになった。たとえば、野村総合研究所がまとめた「おたく」像は、「こだわりのある対象を持ち、その対象に対して時間やお金を極端なほど集中的に消費しつつ、深い造詣と創造力を持ち、かつ情報発信活動や創作活動なども行っている人々」(野村総合研究所, 2005)と定義されており、差別語として用いられた80年代とは著しく異なったイメージとなっている。特に、90年代後半から急速に普及したインターネットは、詳細かつ膨大な個別情報発信と収集を可能とした点で「おたく」と親和性の高いメディアであり、「おたく」層はこうした情報機器やメディアを使いこなすスキルが高いと特徴づけられている(川上・電通メディア社会プロジェクト, 1999)。

さらに、「おたく」の文化と行動を理論化し、その価値を社会的に発言する「おたく」系文化人の活躍が、いわば「おたく」の理論武装をもたらしたという要因も大きい。代表的な言論人として、初期に決定的役割を果たしたのは岡田斗司夫であり、大塚英志や唐沢俊一、本田透といった作家・ジャーナリスト、宮台真司や東浩紀、森永卓郎といった学術研究者、斉藤環などの精神医学者などが、「おたく」の心理行動傾向のあり方を論じ、従来のステレオタイプ的な見方を突き崩そうとしてきた。たとえば、そうした言論人の一人である歴史家の長山靖生によれば、「おたく」とは「日本の若者(特に男)が、はじめて自分の好きなことを公言し、また実践しはじめたという意味で画期的な現象だった。それ以前の日本男児は

「好き・嫌い」ではなものをいわず、「正しい、正しくない」を規準にしてものを考えていた。たとえそれが嫌なことであっても「正しい」ことを選択するのが、それこそ正しいことだったのである。(略) 自分の、自分による、自分のための」耽溺は、みんなおたくである。そうして、そのような一見消費的なおたく精神こそが、「文化」にとって真に生産的なものなのだ(長山, 2005)と述べ、その心理行動傾向を評価した。もちろん、こうしたポジティブな「おたく」解釈の数々は、初期から「おたく」自身によって主張されてきた言説であるが、それが単なる「いいわけ」ではなく、一定の説得力をもって受容されるようになったのは、一般社会に広く認知された言論人に語られたこと、および90年代の「おたく」市場拡大による社会的承認がもたらされてこそのものであろう。

こうして従来の「おたく」像が再解釈されただけでなく、「おたく」層の心理行動傾向そのものが変化していることも指摘されている。社会学者の宮台(1998)によると、初期の「おたく」が、現実社会で満たされないコントロール志向の地位代替という屈折的な背景を持っていたのに対し、成熟社会の実現により、状況を楽しむコミュニケーション志向の屈託の無い「おたく」行動傾向が拡大し、これが一般に受け入れられたことを指摘している。

2005年には、「おたく」を純粹で真摯な青年像ととらえ、その恋愛を描いた『電車男』が社会的に大きな話題となった。また、同年の流行語大賞にノミネートされた「萌え」というキーワードのもとに新しい商品やサービスの数々が生まれ出され、「おたく」=「萌え」系の性的な嗜好を持つ者」という新たな見方も大きく台頭してきた。このように、80年代に差別的な言葉として登場した「おたく」は、経済社会のさまざまな諸相の変化と連動しながら、さらに発展と変化を続けている。

菊池(2000)では、この「おたく」という概念を、社会的ステレオタイプの一つととらえ、98年から99年にかけて大学生を対象とした調査を行った。その調査結果からは、75%の回答者が、「おたく」と称されることに不快感を示すなど、「おたく」という概念には全般的に否定的なイメージが優越していることが明らかとなった。また、この研究では、ステレオタイプの「おたく」態度の構造を分析し、「趣味への没入」「社会的内向」「自己流の価値観」「孤独志向」の4因子を見だし、さらに「おたく」態度がコミュニケーションスキルの欠如とは必ずしもつながらないことを示した。

しかし、この調査が行われて以降、前述したような「おたく」文化の拡大と社会的受容の潮流によって、ネガティブに偏った「おたく」イメージは、かなり変化している可能性が考えられる。本研究では、このような社会状況の変化をふまえて、現在の大学生がおたくに対して持っているイメージを検討するものである。

ただし、「おたく」は本来差別的な用語であるため、菊池(2000)のような自己報告式での調査では社会的望ましきなどの回答バイアスが強くかかることが予想される。それは、単に「おたく」というステレオタイプが嫌悪されるというだけではなく、逆に、いわゆる「おたく」層は、一般に自らの趣味に関して強い自己顕示欲求を持つと考えられており、こうした回答者は「おたく」イメージをより肯定的に歪めて回答する可能性もある。これらに対し、Greenwald, Mcghee, & Schwartz(1998)により開発された潜在連想テスト(Implicit Association Test: IAT)は、潜在的な概念間の連合強度から対象に対する態度を測定するテスト法であり、これにより回答バイアスの問題を回避することができる。このIATは潜

在的認知指標の中でも比較的信頼性が高く、意図的に反応をかえることが難しいために、偏見や差別などの社会的に不適切とみなされる態度の測定や、自己呈示戦略に影響される自尊心の測定などに適したものとされる（潮村・村上・小林，2003）。こうしたIATのメリットから、「おたく」に対する態度の測定においても、自己欺瞞や自己呈示にかかわる回答バイアスを除去した「おたく」イメージに、より適切にアプローチできるものとする。

このIAT実施方法はコンピュータ呈示だけでなく質問紙を用いる紙筆版のテスト方法もあり、両手法の測定値には比較的高い相関が報告されている（岡部・木島・佐藤・山下・丹波，2004）。そうしたテストの中でも、Mori（2006）が開発した紙筆版FUMIE（Filtering Unconscious Matching of Implicit Emotions）テストは、単一概念の測定が可能で実施が容易だという特長がある。このテストを使ったImada, Yoneda, & Mori（2004）やMori（2004）では、従来の顕在指標には反映しない潜在的な態度の相違や変化を測定できることを示した。本研究では、このFUMIEテストを使用し、現在の大学生の潜在的レベルでの「おたく」に対する態度を測定する。あわせて菊池（2000）で作成された「おたく」態度尺度や「おたく」自己評価項目を用いて顕在的指標としての「おたく」態度を測定し、これと潜在的指標との関連性を検討することを第一の目的とする。

また、浅羽（1991）が指摘するように、「おたく」が特定の情報体系の共有を志向し、同好の士と密接な関係性を持つことに特徴づけられるとすれば、所属する団体の「おたく」文化に対するコミットメントの違いが、潜在的・顕在的な「おたく」態度と関連するものと予測される。特に団体自体がおたく文化に深く関与したメンバーで構成される場合は、個人としては抑圧されがちな「おたく」に対するポジティブな潜在的態度が顕在レベルに現れやすいことも予想される。本研究では、大学生の所属サークルによる違いを比較することにより、こうした「おたく」態度の特徴について検討するものとする。

方 法

調査日時 2006年1月および2006年7月。

被験者 信州大学の学生95名（男52名，女43名）。平均年齢は20.2歳。被験者の所属サークルは、「SF & Mystery 研究会（以下では単にSF研とする）」が15名，それ以外の「文化系」が26名，「体育系」が28名，無所属が26名であった。なお，文化系と体育系サークルの両方に所属していた被験者（3名）は，「体育系」に分類した。

ここで対象としたSF研というサークルは，いわゆる「おたく」系文化に親和性のある団体の代表と考えたものである。このサークルは，SFという伝統的なおたく系文化を志向しているだけでなく，「おたく」の祭典として知られるコミックマーケットやSF大会などのイベントなどに参加実績があり，メンバーには「おたく」に関して受容な態度と「おたく」性の自覚が共有されていると考えられる。

材料 紙筆版FUMIEテストと，菊池（2000）で用いた「おたく」態度尺度26項目，および「おたく」に関する自己評定3項目を用いた。

手続き 紙筆版FUMIEテスト，「おたく」態度尺度（菊池，2000），「おたく」自己評定の順におこなった。

紙筆版 FUMIE テスト

「おたく」「アニメ」「ゲーム」の3種類の単語、および、これらの3単語とは意味的に関連のない「その他の単語」数種類を用意した。Mori (2006) にならって1試行あたり60単語を用意して、そのなかに「おたく」「アニメ」「ゲーム」の3種類の単語を混ぜた。被験者には、60単語について、良いことを意味する単語には○印、悪いことを意味する単語には×印をつけるように指示した。全10試行のうち5試行では、「おたく」「アニメ」「ゲーム」の3種類の単語に対して○印をつけるよう指示した。残りの5試行では、「おたく」「アニメ」「ゲーム」の3種類の単語に対して×印をつけるよう指示した。これらの試行を交互におこなった。FUMIE テストは、本来1種類の単語を対象とするが、「おたく」の概念の多様性を考慮し、「アニメ」「ゲーム」などの「おたく」コンテンツ産業の代表的な概念とともに用いることで、イメージをある程度限定することを意図した。

「おたく」態度尺度

ステレオタイプ的な「おたく」態度をもとに作成された26項目の「おたく」態度尺度の項目(付録を参照)に対して、「全くそうでない」から「かなりそうである」の5段階で評定を求めた。この尺度は、「趣味への没入」「社会的内向」「自己流の価値観」「孤独志向」の4下位尺度からなり、それぞれの下位尺度ごとに集計・分析をおこなった。

「おたく」自己評定

「あなたは「おたく」と言われて、自分に思い当たるフシがあるか」「おたく的」と言われると不愉快か」という「おたく」に対する自覚とイメージを表す2項目と、「周囲におたく的な人がどれくらいいるか」という周囲の環境を問う一項目の計3つの質問に対し、それぞれ5段階で評定を求めた。

結 果

サークル別比較の妥当性と自己評定について

所属サークル(SF研、文化系、体育会系、無所属)を独立変数として、「おたく」についての自己評定値(5段階評定を1点~5点に換算。肯定的な回答が高得点)を従属変数とした1要因4水準の分散分析をおこなった。その結果、項目「おたくと言われて思い当たるフシがあるか」($F(3,90) = 7.99, p < .01$)と項目「周囲におたく的な人がどれくらいいるか」($F(3,90) = 18.47, p < .01$)の2項目に対する評定値で有意差が認められた。多重比較の結果、いずれもSF研の所属者が他のグループに対して高い値を回答していたことが明らかになった。SF研グループの項目「思い当たるフシ」の平均評定値[SD]は、4.20 [0.94]であったのに対し、その他の3グループでは、2.59 [1.22]。同じく項目「周囲のおたく」は、SF研4.73 [0.46]、その他3.03 [0.94]であった。項目「不愉快」については、AD研2.87 [1.19]、その他3.16 [1.15]であった。この結果から、仮定通り、SF研メンバーは「おたく」という自己認知が強い(もしくは、「おたく」という自己認識を示すことに抵抗がない)ことが明らかとなった。男女間ではこれらの自己評定値に有意な違いは見られなかった。

また、自己評定値に関して肯定的な回答をした者(4または5を選択)が全被験者に占める割合を見ると、「おたくに思い当たるフシがある」とした者は37%(SF研を除いた場合、

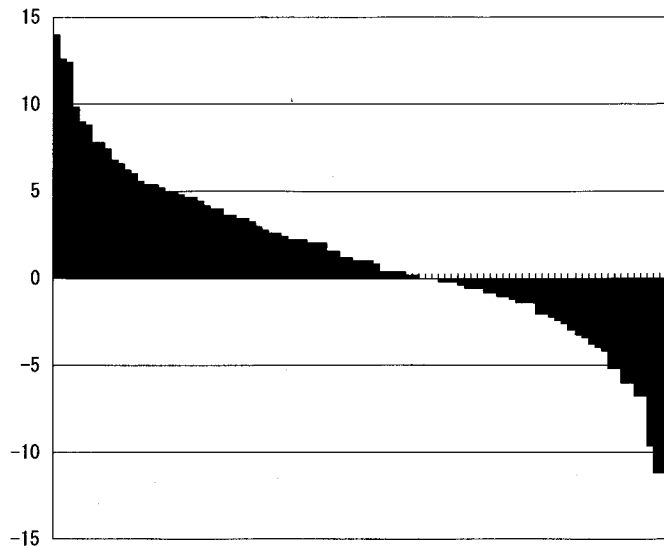


図1 全被験者 (n=44) のIAS。正の値はポジティブなイメージを示す

25%), 「不愉快と感じる」のは37% (同32%), 「周囲におたくがいる」は43% (同28%) であった。

紙筆版 FUMIE テスト

ターゲット単語に○をつける5試行の平均作業量から、ターゲット単語に×をつける5試行の平均作業量を引いた値をIAS (潜在連想スコア: Implicit Association Score) とした。その際、IAS が正の値ならば「おたく」に対して肯定的、負の値ならば否定的となるようにした。図1は全被験者の得点を示したものである。

IAS の平均値 [SD] は1.13 [4.89] であった。これは正の値ではあるが、母平均が0という帰無仮説は両側検定で棄却できなかった ($t = 0.91, df = 43, n.s.$)。男女別のIAS 平均値 [SD] は男1.13 [4.71], 女1.13 [5.14] であり、この間に有意な差はみられなかった ($F(1, 93) = 0.00, n.s.$)。

所属サークル別のIAS の平均値 [SD] は、SF 研が2.63 [3.11], 文科系1.02 [4.97], 体育系0.29 [5.46], 無所属1.28 [5.04] であった (図2)。1要因4水準の分散分析をおこなった結果、統計的に有意な差はみられなかった ($F(3, 91) = 0.75, n.s.$)。しかし、それぞれの群に対し、母平均が0であるという帰無仮説で検定を行ったところ、SF 研のみが両側検定で帰無仮説を棄却でき、有意な正のIAS 得点を示した ($t = 3.28, df = 14, p < .01$)

「おたく」態度尺度

「全くそうでない」から「かなりそうである」までを1~5点として下位尺度ごとに平均点を算出した。得点が高いほど、自分の行動にその傾向が強いことを意味する。被験者全体の「趣味への没入」の平均値 [SD] は3.43 [0.81], 「社会的内向」は2.72 [0.59], 「自己流の価値観」は2.85 [0.80], 「孤独志向」は3.47 [0.70] であった。

サークルによる「おたく」態度の違いを検討するため、それぞれの下位尺度得点別に1要因4水準の分散分析をおこなった (図3)。その結果、「社会的内向」($F(3, 91) = 3.50, p$

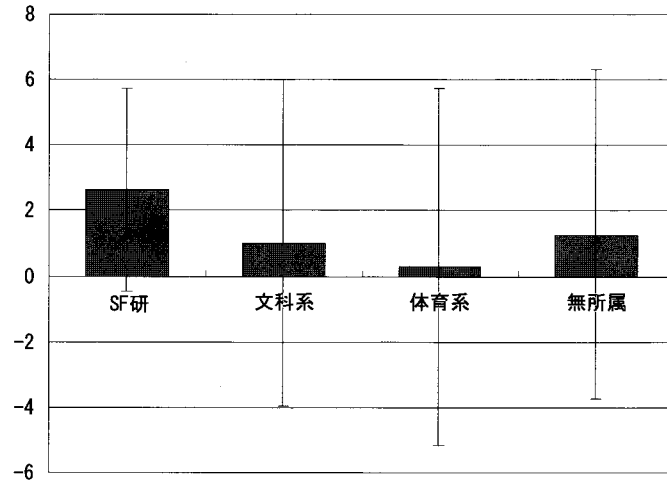


図2 サークル別のIAS

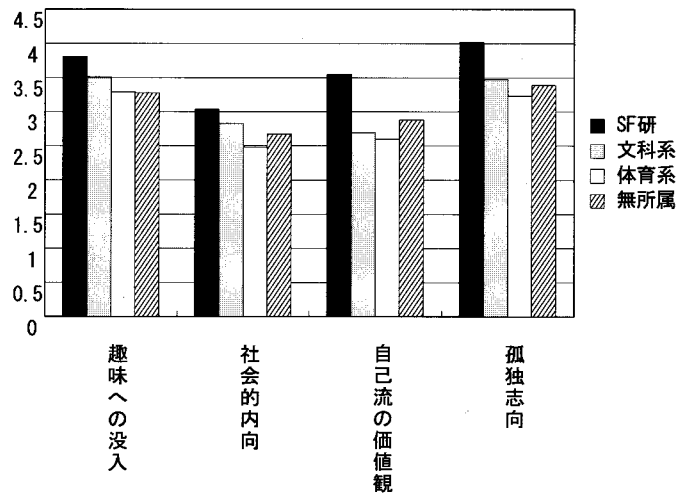


図3 サークル別の「おたく」態度尺度の下位尺度得点

<.05), 「自己流の価値観」 ($F(3, 91) = 5.80, p < .01$), 「孤独志向」 ($F(3, 91) = 4.65, p < .01$) の3下位尺度で群間に有意差があった。多重比較の結果, 「社会的内向」ではSF研>体育系, 「自己流の価値観」ではSF研>文化系, 体育系, 無所属, 「孤独志向」では体育系, 無所属であった。

また, 男女差を比較したところ, いずれの下位尺度でも平均に有意な差は認められなかった。下位尺度の平均値得点は「趣味への没入」は男3.60 [0.78], 女3.21 [0.79] であった。「社会的内向」は男2.73 [0.62], 女2.70 [0.57] であった。「自己流の価値観」は男3.03 [0.86], 女2.63 [0.66] であった。「孤独志向」は男3.63 [0.73], 女3.27 [0.63] であった。

表1 IASと「おたく」態度下位尺度・自己評価得点との相関

	IAS	趣味への 没入	社会的 内向	自己流の 価値観	孤独志向	思い当た るフシ	不愉快
趣味への没入	.25*						
社会的内向	.04	-.05					
自己流の価値観	.16	.27**	.41**				
孤独志向	.20*	.08	.48**	.37**			
自己 評 定							
思い当たるフシ	.18	.50**	.20*	.32**	.33**		
不愉快	.07	-.08	.08	-.10	-.03	.03	
周囲におたく	.09	.18	.20	.23*	.27**	.42**	-.00

**p <.01, *p <.05

IASと「おたく」態度尺度の下位尺度得点の相関

IASと「おたく」態度尺度の下位尺度得点の相関係数を算出した(表1)。その結果、IASと「おたく」態度尺度の下位尺度や「おたく」自己評定との関係はいずれも正ではあったが、有意な相関は「趣味への没入」「孤独志向」にごく弱いものが見られただけであった。その一方で、「おたく」自己評定の中でも「自分に思い当たるフシがあるか」項目では、すべての「おたく」態度尺度と有意な正の相関を示した。

考 察

FUMIEテストの結果では、全被験者でのIAS平均は正の値を示したが、その値は母平均0と有意な差は認められなかった。この結果は、全体傾向として、文化と結びついた「おたく」概念に対しては、ネガティブな潜在的イメージが優越しているわけではないことを示すものである。一方、「おたく」に対する自己評定の結果からは、自分が「おたく」と形容されることに不快を感じる回答者が全回答者中37%であった。この値は、菊池(2000)調査とは評定段階が異なるために直接比較することはできなかったが、少なくとも90年度末には70%以上が不快と感じていた「おたく」という表現に対し、今回の調査対象の過半数は不快感を報告していないことになる。また、今回のいずれの指標においても、男女差が観察されなかったことも興味深い。

このような結果は、2000年以降に「おたく」の社会的イメージがより受容的に変化しており、それが顕在的指標に反映するとともに、回答バイアスを取り除いた潜在指標としても測定されたと解釈することができるだろう。もちろん、前回調査時にも潜在的にポジティブな「おたく」態度が持たれていたにもかかわらず、顕在的な指標には反映しなかった可能性もある。

ただし、今回のFUMIEテストで測定対象となったのは、「おたく」的な行動傾向そのものではなく、「アニメ」や「ゲーム」といった比較的受容されている文化と結びついた「おたく」概念であることも、ネガティブな態度が見られなかったことに関与する可能性も考えられる。前述したように、90年代終盤以降、「おたく」市場と「おたく」層の拡大は、その概念の変質自体も引き起こしている。中でも、前回の調査時点では全くポピュラーでなかつ

た「萌え」が、現在では「おたく」の中心的属性として認知されるようになった。しかし、この「萌え」系は新しい市場価値として評価される一方で、「萌え」を志向した個人特性は、しばしば奇異の目で見られ、社会的不適格者や犯罪予備群という偏見が付きまとうことも否定できない。今回の IAT では、そうした「おたく」概念の質的な多様性に踏み込むことができず、そのアニメやゲームといった比較的受容しやすい領域でのネガティブ・ポジティブ態度のみを問題とした。しかし、「おたく」という現象をより深く考察するためには、「萌え」を中心とした構造的な変化をふまえた「おたく」の捉え直しから研究にかかるべきであった。

IAS は、所属 4 サークル間で平均値に統計的に有意な差が見られなかったが、SF 研の IAS の平均値は他の群よりも比較的高く、母平均は 0 より有意に大きいという結果となった。顕在的な指標である「おたく」態度尺度や自己評定においても、このグループは高い「おたく」態度を示した。この点で、SF 研は顕在指標と潜在指標がともに高い。しかし、全体としてみると IAS と「おたく」自己評定（「思い当たるフシ」や「不快」）の相関は見られていない。このことから考えると、この SF 研のポジティブな態度は、意識レベルでの強い「おたく」性自覚と潜在的態度が連動していたと解釈するよりも、特定の文化にコミットメントが深い集団では、潜在的な態度が顕在的にも報告されやすい環境にあったと考えるべきであろう。もしくは、潜在的なポジティブさを顕在化させることに抵抗の無いメンバーがこの集団を構成したとも言える。このグループの被験者数が少ないため、はっきりした結論を出すことは難しいが、他のグループが多様な「おたく」態度を持った学生の混成であったのに対して、この SF 研の IAS の分散が小さいことも、この結果に影響を与えたのではないだろうか。この「おたく」態度に限らず、所属するサークルといった周辺環境要因が、潜在的態度の形成と表出に与える影響といった観点から論ずることができれば興味深いと考えられる。

Asendorpf, Banse, & Mucke (2002) では、IAT と質問紙でシャイネスの自己認知を測定し、それらと実際のシャイ行動の関連を検討した。その結果、コントロールできない自発的なシャイ行動は IAT と関連し、意図的なシャイ行動は顕在的な質問紙の報告と関連することを示した。今回の「おたく」調査において用いられた顕在的な 2 指標においても、「おたく」態度尺度は、「おたく」概念を明示的に示さずに自分自身の行動特性や価値観を問うものであり、一方、「おたく」自己評定は、「おたく」という言葉そのものを用いて態度を問うものであった。いわば前者がより無意図的な「おたく」行動を反映し、後者は自覚的な態度を反映すると想定できる。IAS との相関が比較的に見られたのは、主として前者の「おたく」態度尺度であり、一方で、直接的な自己評定においては両者の相関が弱いものであった。前者のうちでも、「趣味への没入」といった下位尺度に IAS の正の相関が見られたが、社会的にネガティブな概念である「社会的内向性」には相関は見られない。後者の自己評定でも、特に「おたく」に対する明示的な不愉快さの報告は、IAS とほとんど相関が無い。これらの結果を総合すると、潜在的な「おたく」への態度は、主にネガティブな質問項目で顕在的に問われた場合に表出が抑制され、その結果、潜在的指標と顕在指標との関連が現れなくなると考えられるのではないだろうか。しかしながら、これらの点は微妙な相関の相違に基づく解釈であり、先に述べた「おたく」態度構造の再構成とあわせて、さらに検討すべき課題と

考える。

引用文献

- 浅羽通明 1991 ニセ学生マニュアル 死闘篇 徳間書房
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Muecke, D. 2002 Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 380-393.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, L. K. 1998 Measuring Individual Differences in Implicit Cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Imada, R., Yoneda, H., & Mori, K., 2004 The FUMIE Test: A group performance paper test to measure implicit evaluation of a concept. The 5th Tsukuba International Conference on Memory, Tsukuba.
- 川上和久, 電通メディア社会プロジェクト 1999 情報イノベーター共創社会のリーダーたち 講談社
- 菊池 聡 2000「おたく」ステレオタイプと社会的スキルに関する分析 信州大学人文科学論集 人間情報学科編, **34**, 63-77.
- 中森明夫 1989 僕が「おたく」の名付け親になった事情 別冊宝島104おたくの本, 89-100.
- 長山靖生 2005 おたくの本懐 「集める」ことの英知と冒険 筑摩書房
- 野村総合研究所 2005 オタク市場の研究 東洋経済新報社
- 皆川ゆか 2006 若者は何故「萌え」を選ぶのか 情報の共有化と要素嗜好から「オタク」を考える メカビ (講談社), Vol.1, 82-91.
- 宮台真司 1998 これが答えだ 飛鳥新社
- Mori, K. 2004 Reliability and Validity of the FUMIE Test for Measuring Implicit Attitude. The 21st Annual Convention of the Japanese Cognitive Science Society.
- Mori, K. 2006 A Paper-format Group Performance Test for Measuring the Implicit Association of Target Concepts. Unpublished manuscript submitted for publication.
- 岡田斗司夫 1996 オタク学入門 太田出版
- 岡崎康成・木島恒一・佐藤勉・山下雅子・丹波哲雄 2004 紙筆版潜在連合テストの妥当性の検討: 大学生の超能力信奉傾向を題材として文教大学人間科学部 人間科学研究, **26**, 145-151.
- 潮村公弘・村上史郎・小林知博 2003 潜在的社会的認知研究の進展 IAT (Implicit Association Test) への招待 信州大学人文学部人間科学論集人間情報学科編, **37**, 65-84.

本研究は平成17-18年度科学研究費萌芽研究「集団式潜在連想テストを活用した大学教育の効果の測定」(研究代表者堀井謙一)に基づいて行われた。調査にあたっては、信州大学3年生 前野佑子・山田麻美・山田真世の3名の協力を得た。

・付録 「おたく」態度尺度の26項目

-
- | | |
|---------|--|
| 趣味への没入 | 1. 趣味に対して何らかのこだわりがある
2. 趣味に対してかなり深い知識を持っている
3. 自分の得意な分野について話し始めると止まらない
4. 趣味に熱中する自分が好きだ
5. 趣味にお金をかけている
6. 様々な趣味を持っている
7. 気に入ったものをつい集めてしまう
8. 一つのことに熱中して寝食を忘れることがある
9. 自分がおもしろいと思うことは人がなんと言おうと気にならない |
| <hr/> | |
| 社会的内向 | 10. 他人と話すことは苦手である
11. 明るいと言われる*
12. 集団で行動するのは苦手である
13. 自分の内面に関わることをあまり話さない
14. あまり知らない人が周囲にいるとき目立つのが好きである*
15. 周りの人にあまり関心がない
16. 世間的にはつまらないことでも仲間内で盛り上がる*
17. 共通した趣味を持つ友人以外とはあまりつきあわない
18. スポーツをするのが好きである* |
| <hr/> | |
| 自己流の価値観 | 19. 身だしなみに気をつかわない方である
20. 流行のファッションはくだらない
21. おしゃれだとよく言われる*
22. 自分がおもしろいと思うことは社会的に評価されていないことが多い |
| <hr/> | |
| 孤独志向 | 23. マンガが好きである
24. ゲームが好きである
25. 異性の友人が多い*
26. 部屋にこもるのは嫌いだ* |
-

*は逆転項目